

京の社明くん賞・京都府推進委員会委員長賞

## 誰もが誰かを放っておかない社会

京都市立洛北中学校三年 北村 結菜

これは以前、私が委員会の役割で、修学旅行で行う平和宣言の作成を担当していたときの出来事だ。その平和宣言は、学年全員分の思いをつめこむ、いわば集大成だった。なので、私を含む担当の三人で何度か集まり、かなり相談しながら書き上げた。「平和」をうたう文を書く、ということ、完成したものにはそれなりの正義感と自分たちの信じる理想がのせられていたと思う。「これが正しいんだ」というある種の自信もあった。

しかし、完成したものをいざ提出すると、返ってきたのは大量の赤い添削が入った原稿だった。それに加え先生は私の考えが汲まれた箇所を読んだ違和感を指摘した。今思えば先生は私の少しの考え違いを教えてくださいのだからうけれど、自分よりまっとうな意見で、自分の信じていたことを「これらがうんじゃない。」と言われたのは、当時の私にとって一番キツかったのだ。頭をガツンと殴られるようなショックで、でも自分の手で心臓をしぼられるようないたたまれなさがあつた。

そんなこんなで、教室に戻ったとき、私は思わず涙をこぼしてしまった。運の悪いことに次の授業は全校集会。クラスメイトが集まり並ぶ中で、一人の涙は誰かに気づかれる。

「泣いてるっ!？」

「大丈夫？」

心配されると気丈にふるまつしかない。

「泣いてないっ!大丈夫。ごめん。」

どうか放っておいてほしい。声をかけてくれるな。親しい人でも今は話せない。どうしても冷たく対応してしまう。体育館へ行く同級生一人一人を避けていこうとした。

けれども、放っておいてくれなかつた友人がいた。

「えっ泣いてる?大丈夫かあんだ。アカン。どう見ても大丈夫じゃないやつに大丈夫かっつきいたらダメやねん。えー泣いてる。珍しい!わかつたわ、あのキャラクターが好きすぎて泣いてるんやろ。当たり?ハハッ。言いたくなかつたら言わんでも良いけど。先生か、平和宣言か!?キツイ言うてたしな!」

話すこともままならない私にかわってその友人は私に話し続けた。彼女もとまどいが大きかつたのだと思う。不器用にも程があつて、話すことが

全て突拍子なく、意味がわからない。先生に言われた言葉で真っ白、そしてぐちゃぐちゃになった頭でも、その友人の話にはツッコみを入れるしかなかった。散々な気持ちの中で彼女がくれた笑いはその時の私の一番のやりどころになつてくれた。

きつとこのとき、彼女が私を放つて先に体育館に向かつていたら、私はその日の帰りもろくに家路につけなかつた気がする。それ程その友人が私を放つておいてくれなかつた、放つておかなかつたことは、大きいことだった。何様だ、と思うけど、その行動が私にとっての一番の正解だったと言えるのだ。

さて、原稿用紙三枚にもわたつてこの話を書いたのにも、しっかり意味がある。この作文は「非行・犯罪のない明るい社会」を目指す運動のためのもの。

そうして考えると、前の話で一人の友人が私を放つておかなかつたことは非行や犯罪の抑止にも通じると思えた。彼女が私と一生懸命話そうとしたのは、「泣いてほしくない」と思つてくれたからだと思うのだ。その思いを不器用にも伝えてくれたおかげで私は「前向きでいよう、泣かないでいよう」と気持ちを引きかえられた。それは、もしも犯罪に手を染めようとした時でもきつと同じで、

「〇〇のことが大切。」

「苦しんでほしくない。」

「泣かないで。」

「笑ってほしい。」

そんな思いを持つてくれる人がいれば、伝えてくれる人がいれば、おのずと手を引いて足を洗おうと思えるのではないか。私が犯罪や非行をしたくないと思うのも大切に思つてくれる友人や家族や先生がいるからだ。嫌な言い方かもしれないが、人とのつながりは自分を社会と結びつける鎖といえよう。

だから、この作文での結論はこうだ。

誰もが誰かを放つておかないことが犯罪や非行をなくす鍵になる。一人でも何人でも自分を大切に思う人、がいることを実感できると良い。それは社会を生きる力になり、心のよりどころになれる。

正直きれいに思えるけれども、私は私を元気づけてくれた友人は正しい、と信じているのだ。

さて結論を出したからには実行に移したい。まずは近くににいる人に、それからクラスの人や先生や地域の人におはよう、と挨拶を。泣いている人を笑顔にしよう。もし近くの人が一人で正しい道からそれていっても放つておかない。伝えられれば、伝わればいいのだ。君が、あなたが大切な人だから、と。